
命の味

澄田 康美

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の味

【Nコード】

N01460

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あらすじ

人を喰らう妖魔、ルーミア。そんな彼女はある日、孤独で病弱な人間に出会った。

（前書き）

前書き

こんにちわ、澄田と申します。

この話は超シリアスです。そして駄文です。

わしは以前にも話を書いてきましたけど、これは今まで書いてきた話と違うってレベルではありません。

それを承諾して見てください。ではどうぞ。

ここは幻想郷、そこに住んでいる妖怪ルーミアは、その可愛らしい容姿とは裏腹に、人を喰らう妖怪なのである。

今日もルーミアは、自分の目になう食事を・・・人を探していた。空の方から自分のいる森をそれとなく見渡していると、森の中を一人歩く、男の人間がいた。

それを見つけたルーミアは、一目散にその方へと飛んでいった。止め切れていないよだから察するに、かなり長い時間食事を取っていなかったようである。

空から地面まで真っ直ぐにその人間の前へと立ちふさがるように降り、お決まりの台詞を言った。

「あなたは、食べてもいい人類？」

その問いに対して、その人間は不思議そうな様子で尋ね返してきた。

「食べるって・・・まさか君は、私を食べる気なのかい？」

「そのつもりだから、わざわざ聞いたんだよ。」

「そうか・・・でも、こんな私を食べても、恐らく何も美味しくはないよ。」

と言って、その人間は服をめくって自分の体を見せてきた。

ルーミアがそれを見た瞬間、さつきまであった食欲が跡形もなくなってしまうた。

その人間の体は、骨と皮ぐらいしかなく、いたる所に病気が何かで出来たような斑点があり、とても人の体とは思えない物であった。

さながら、既に死んでいる物のように・・・
よく見れば、その者の腕や足も、その身長から考えて明らかに細かったのだ。

こんな様子を見せられたのであれば、さすがのルーミアも食べたいとは思えなくなった。

ルーミアはそれ以上に、その人間がなぜそうなったのか尋ねた。

「ねえ・・・どうしてお兄さんは、そんな体なの？」

その人間は、生気のない調子でルーミアに返した。

「・・・病気だよ。それも生まれつきの病さ。だから、治す術はないんだよ。」

「びょーき？びょーきでそうなったの？」

「そうだよ。この病気のお陰で、私は村からも追い出されたんだ。でもそれは仕方のない事だよ。」

悲しそうに語るその目を、ルーミアはただじっと見つめていた。その語った後に、ルーミアがある事を尋ねた。

「ねえ、じゃあ今はどこに住んでるの？」

そう尋ねられた人間は、その場から割と近くにあった古い家を指差した。

「あそこだよ。あそこなら誰も近寄らないから、私もどうにか住む事が出来るんだよ。」

「そーなのかー。」

お決まりの一言を言うと、人間は改まった様子でこう言ってきた。

「さて・・・私を食べる気がなくなったのなら、私はこれで失礼するよ。」

と言うと、その人間は自分の家へと今にも倒れそうな体を支えて歩いて行った。

そんな様子を見せられたルーミアは、じっとしてなどいらなかった。

ルーミアはその人間の歩いていく方に先回り、こんな事を言ってきた。

「荷物持つてあげるよ。」

現にその人間は、背中にリュックサック的な物を担いでいたのだが、どう見ても重そうな様子であった。

そんなルーミアの好意を、その人間は申し訳なさそうな調子で答えた。

「駄目だよ、そんな事をしたら、君に私の病気が移ってしまうじゃないか。」

と言っている内に、ルーミアが既にそのリュックに対して手を伸ばしていた。

「私は妖怪なんだから、人間の病気なんて移らないもん。」

と言いながら、強奪でもするようにその人間からリュックを取り去

り、自分の頭の上に持つてきていた。

そんな様子のルーミアに、その人間は少し笑顔になってこう言った。

「そうか、それは一本取られたな。じゃあ、遠慮なく頼むよ、お譲ちゃん。」

「うん。」

ルーミアもまた、笑顔で返した。

少しして、ルーミアはその人間の住む家の中でぼーっと一人で座っていた。

見た所目新しい物はないが、生活感のある整った部屋は、見ていて中々飽きない物である。

ルーミアがあっちこっちを見ている内に、さっきの人間が、作ったばかりと思われる料理を運んできた。

それは床にカタンと置かれ、ルーミアは完全に視線を奪われてしまった。

「これって・・・」

ルーミアがぼそりと言うと、その人間は察したように答えた。

「さっきのお礼だよ。君はお腹が空いているみたいだから、作ってみたんだよ。まあ君が食べたいかどうかは・・・」

と言っている内に、ルーミアが既にその料理にがつついていた。

「・・・ははは、味とかどうだい？」

その人間がそんな様子のルーミアに尋ねると、ルーミアが元気よく答えた。

「おいしいー！」

子供らしい完結かつ素直な感想に、その人間は安堵の表情を浮かべた。

「そうかそうか、口にあったのならなによりだ。」

しばらくルーミアの様子を見てみると、ルーミアは出された料理を綺麗に平らげてしまった。

その後で手を合わせて、元気よく食後の挨拶を言った。

「ごちそーさまでした。」

そう言うと、その人間は食べ終えた皿を片付けようとした。

「それじゃ、片付けをしようか・・・」

と皿を持っていこうとすると、ルーミアが後ろからその人間の服を軽く引っ張った。

「私も、片付け手伝う。」

そう言われた人間は、そうかと言っているような表情を浮かべて、二人で台所まで歩いていった。

片付けが終えた後でも、ルーミアはまったく帰ろうとしなかった。完全に居座っていたのだ。

人間はそれが妙だなと思い、ルーミアに対して率直に言ってきた。

「・・・帰らなくていいのかい？ここにいても楽しい事なんて何もないよ？」

そんな事を言うと、ルーミアが少し真剣な調子で返してきた。

「私・・・しばらくここに住んでもいい？」

そう言われた人間は、少し戸惑ってしまった。

「どうしてだい？家に帰りたくないとか、そういった理由でもあるのかい？」

そう尋ねると、ルーミアは首を横にぶんぶん振ってきた。

「違うよ。私は・・・お兄さんのお手伝いをしたいの。」

嘘や偽りなどはまったく混じっていない言葉と瞳の前に、その人間は目に涙を溜めて言ってきた。

「・・・それは、本当かい？」

「もちろんだよ。」

そう言うと、その人間はルーミアをぎゅっと抱きしめていた。

「ありがとう・・・お譲ちゃん・・・」

そう言われ、ルーミアもまた抱きしめ返した。

「うん。」

その後、二人はしばらくの間、生活を共にしていった。

ルーミアは、その人間に極力無理をさせないようにと身の回りの世話を手伝った。

その人間もまた、ルーミアが間違った事をしないように、要所要所で言う事は言っていた。

人間と妖怪の奇妙な共同生活。その人間にとっても、ルーミアにとっても、恐らくは幸せな毎日であつたろう。

ある日、あの人間が、ルーミアにある物を手渡してきた。
それは、少し粗末だが綺麗な黒いリボンであつた。

「これって・・・もしかして私に？」

嬉しそうな様子のルーミア。

「そうだよ、今までずっと私の手伝いをしてくれていたんだ。それぐらいは当然だよ。まあ君が気に入るかどうかは・・・」

と言おうとしていた時には、ルーミアがその人間に飛びついてた。

「ありがとう！！お兄さん！！」

無邪気な笑顔を浮かべて、ルーミアは力強くその人間に抱きついた。

「ははは、喜んでくれて何よりだよ。」

人間もまた、嬉しそうな様子であった。

そんなやり取りの後で、ルーミアはすぐに頭に付けていたリボンを、さつき貰ったばかりのリボンに付け替えた。

「どう？似合ってる？」

付け替えたリボンをアピールするように尋ねるルーミア。

「うん。似合ってるよ。」

「本当？それじゃあ、ちょっと外に出てくるね。」

「あ、ちょっと待ちなさい・・・」

と人間が言う間もなく、ルーミアはそこを飛び去っていった。

「やれやれ・・・」

呆れた様子で、飛び去っていったルーミアを、ただ眺めるしかなかった。

一方ルーミアは、今までになく楽しそうに空を飛んでいた。
今まではただ食事の対象でしか見ていなかった人間の手伝いをし、

そのお返しに貰ったりボン。

ルーミアの中で、今までにない喜びと・・・不思議な感情が体中をめぐっていた。

その喜びを伝えようと、ルーミアはチルノや大妖精、ミスティアやリグルがいる湖へと降り立った。

久々に見る旧友に、他の者達はものめずらしそうな様子でルーミアを見ていた。

「ルーミア、今までどこにいたの？」

リグルが真っ先に尋ねると、ルーミアは調子よさそうに答えた。

「人間の所だよ。」

そう言うと、ミスティアが信じられない様子で言ってきた。

「それ、本当なの？」

「うん、そーだよ。」

とルーミアが言うと、今度はチルノがこう言ってきた。

「へえ、あのルーミアが、人間と一緒にいるだなんてね。」

少し感じの悪い調子で言われても、ルーミアはまったく気にしない。

「うん、お兄さんは優しい人だから、ずっと一緒にいても楽しいんだもん。頭のリボンだって、お兄さんに貰ったんだよ。」

そう言って、ルーミアはそれをアピールしてきた。

「あ、本当だ。前よりずっと綺麗になってる。」

大妖精が率直な感想を述べた。

「そうでしょ？似合ってるでしょ？私はそれを伝えたかったただけだから、それじゃあね。」

と言うと、ルーミアはその場を颯爽と飛び去っていった。
うきつきとした気持ちで、ルーミアはあの人間がいる家へと真っ直ぐ飛んでいった。

ルーミアの心の中は、ただ嬉しい気持ちで一杯だった。
笑顔が止まらない調子で、ルーミアはあの人間のいる家の近くまで来た。

しかし、ルーミアの視界にあの家はなかった。いや、正確に言えば、家だった物しかなかった。

不自然に思ったルーミアは、家の近くにふらつと降りた。
降りた場所にはいたのは、見た事もない大きな妖怪と・・・ぼろきれのようになった、あの人間であった。

「んん？なんだてめえは？こいつの仲間かあ？」

その妖怪が、ルーミアを見て話しかけてきた。

「・・・そこにいる人間をぼろぼろにしたのは・・・この家を壊したのは・・・あなた？」

さっきまでとは明らかに違う、ただ怒りのみがルーミアを覆い尽くしていた。

「そうともよ、暇だったから通りがかりのこの家を潰してたら、中からこんなよわつちい人間が出てきたんだよ。まったく、こんなんじゃない面白くもなんともねえなあ。」

退屈そうに語るその者に、ルーミアが今にも襲いかかりそうな声で言ってきた。

「・・・さない・・・」

「は？なんて言ったんだ、おめえ？」

「私は・・・あなたを絶対に許さない！！！！」

気がつけば、辺りにはあの妖怪であった物がそこかしこに散らばっていた。

そしてルーミアは、頭のリボンが取れた状態で、あの人間を抱きかかえていた。

姿は豹変していても、心はまったく変わっていない。

「起きて！！起きてよお兄さん！！起きてってば！！」

必死に問いかけていると、その人間がゆっくりと瞼を開けてきた。

「・・・ああ・・・誰かと思ったら・・・お嬢ちゃんか・・・どうしたんだい、そんな顔をして・・・何だか見た目も変わっているね・・・リボンも外れているじゃないか・・・」

ルーミアの悲しそうな顔に、その人間はむしろ疑問を抱いているようだ。

そう、なぜルーミアがこんな顔をしているのか、こんな姿をしているのか、その人間は何も理解できていなかったのである。

「お兄さん・・・お兄さん・・・」

抱きかかえ、大粒の涙をこぼし続けるルーミア。

その涙から、その人間は全てを察した様子で、こんな事を言ってきた。

「・・・譲ちゃん・・・私はね・・・君の事を妹のように思っていたんだよ・・・家族のいない私にとって、君という時間は・・・本当に救いになっていったんだ・・・だからせめて・・・ありがとうと言っておくよ・・・」

恐らくはその人間が出せる、精一杯の感謝であった。

そんな事を言っても、ルーミアはただただ泣き続けていた。

「そんな事ないよ・・・だって私は・・・何も出来てないもん・・・」

涙でかすれている声を、その人間はしっかりと聞き取っていた。

それを聞き取った後で、その人間が、ルーミアにある事を頼み込んできた。

「・・・お譲ちゃん・・・私から・・・君に最後の頼みがある・・・」

「何・・・？」

「私を・・・食べてはくれないか？」

「え・・・！？」

突然すぎる頼みに、ルーミアは驚きを隠せなかった。

「私の体なぞ、食べたくないのはわかってるよ・・・でも・・・私はもう長くない・・・だったら私は・・・君の中で、生き続けていたいんだ・・・」

「そんな・・・そんな事・・・出来る訳ないよ・・・」

「お願いだ・・・私の事を思っているのなら・・・頼むよ・・・」

その人間の必死の頼みに、ルーミアは、黙ってうなずいた。

手始めにルーミアは、その人間の腕に噛み付いた。

その時、その人間は、ルーミアが初めて自分の料理を食べた時の感想を尋ねた時と、まったく同じ事を言ってきた。

「・・・ははは・・・味とかはどうだい・・・」

その人間の問いに、ルーミアは涙を流したまま答えた。

「・・・おいしくないよ・・・全然おいしくないよ・・・お兄さんの作ってくれたごはんの方が、ずっとおいしいよ・・・」

そうルーミアが返すと、その人間は明らかにおかしい回答をしてきた。

「そうかそうか・・・口にあつたのならなによりだ・・・」

ルーミアの言つた事との食い違いから、もうその人間は、思考もあゆたわらない状態になつていたようだ。いや、あの時の記憶を蘇らせただけなのかもしれない。

そしてルーミアは、その人間を食していった。涙で濡れ、塩の味ぐらいしかないそれを・・・ただ食べ続けた。

全てを食べ尽くした後で、ルーミアはそれまでで一番悲しい食後の挨拶をした。

「・・・ごちそう・・・さま・・・でした・・・」

挨拶をした後で、ルーミアはその場に泣き崩れた。一晩中、その場で泣き続けた。

その後、ルーミアは水などに頭のリボンが映る度に、その時の事を思い出していた。

彼女は決して忘れない・・・あの人間の事を・・・命の尊さを・・・そして・・・あの味を・・・

命の味 F I N

（後書き）

後書き

・・・駄目だ、リアルで涙が止まりません・・・（；；；）

黒詩鳥さんから、ルーミアで主人公は難しいだろうからやってみろ
と言う事でやってみたんですけど・・・ここまで感動系になるなん
て思わなかったです・・・（；；；）むしろ悲しい系ですかね・・・

今日は半端じゃないインスピレーションに身を任せていたら、こん
な事になっていました（；；；）

駄目だ・・・もう何も書く気がなくなってきた・・・（；；；）

それでも、この話に出てきた人間の為に・・・みなさんの為に・・・
わしは頑張って見せます！！（；'|；；）／

スペシャルサンクス

ルーミア 様

お兄さん 様

チルノ 様

大妖精 様

リグル・ナイトバグ 様

ミスティア・ローレイ様

大きな妖怪

きっかけをくれた黒詩鳥様

では、このような粗末な話を見ていただき、真にありがとうございます！
ました！！

by 澄田 康美

PS、こんなシリアスだけじゃないので、それ以外もよろしく願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0146o/>

命の味

2010年10月15日22時33分発行